

点滴に瞑りつ卯の花腐しかな

貞勝

病床にある者にとって点滴注射は、針を身体に設置するときの痛覚によつて、自分がまだ生きていることを実感し、そして、点滴の液が体内に流れ込むのに要する長い時間は、病気のことや公私の先行き問題をあれこれと考えてしまう時間である。

「瞑る(つぶる)」と言つても眠っているのではない。目蓋を閉じたその裡において様々な想いが交錯しているのである。点滴の時間と卯の花腐しとの照応がよい。

「つ」は、動詞の運用形に付く接続助詞であり、動作の並行・継起することを示す。

サッカーの思はぬ勝利明易し

眞三

テレビ画面を通じて感得される情景や心境を句にするときの問題点は、当該画像・音響が発生する現地を季語選択の時期的基準とすべきであるのか、あるいは、その画像・音響を見聞する作者の所在地を季語選択の時期的基準とするべきであるのか、という問題である。この時期的基準の不一致の問題を嫌うがために、俳句は「眼前直覚」であるとして所謂テレビ俳句を非難する論議もあつた。

また、筆者の基本的見解は、テレビの画像・音響に基づく俳句は、いくら巧みに作つても、現地にいる一次的著作者たるカメラマンや演出・編集者が感得したもの(即ち、作者自身の生の感動ではないもの)に専ら依拠した・フリーライド(ただ乗り)しただけの、いわば二番煎じとも言ふべき、二次的著作物に過ぎないのではないか、ということである。

しかし、掲句には、このような論議を受ける可能性がないように思える。サッカーの試合観戦に没頭して徹夜した作者の感動が、「思はぬ勝利明易し」によつて活写されており、「思はぬ」とすることによつて作者の生きた実感が表白され、眞の著作者としての作者が句の前面に出ているのではないか。

鎌倉に虚子の句展やバラ句ふ

与史

鎌倉の俳人と言えば虚子。虚子からたどる有名な地名の一つは鎌倉である。その鎌倉で虚子の句展が開かれている。会場の熱気を逃れて庭に出てみると、薔薇が咲き誇っている。

薔薇はカーデニングの素材として日本でも人気のあるものであるが、なかでも「鎌倉」は薔薇が良く似合う街である。「薔薇句ふ」とせず「バラ句ふ」と表記したのも鬱鬱気合に合っている。

梅雨晴れ間丹沢連峰彫り深く

溪水

「彫りの深い」とは美男(美女)の賛辞として古くから肯定的に使われている。山巒のくつきり現われた丹沢連峰への賛辞である。

日々丹沢連峰に接して暮らす者、あるいはたまさか登山に訪れた者にとつても、庚の間の晴天に聳え立つ丹沢連峰の神々しさ・清々しさは、その胸に深く落ちるものであろう。梅雨晴れ間の季語が効いている。

梅雨晴れ間乾いた声の鳥の朝

眞三

鳥の声によつて目覚めるという自然な生き方は、筆者が仕事に忙殺されていた頃は決して有り得ないことであつたが、病を得てからは早朝から目がさめることが多い。

作者は朝の鳥の声が乾いた声であると断言する。「乾いた声」の反対語には「湿つた声」が浮かんで来るが、元々鳥の声に「乾いた声」、「湿つた声」があるのだろうか。おそらく直感を大事にする俳人ならではの印象的な捉え方である。

「乾いた声」に対置した「梅雨晴れ間」は、いささか誘導的ではあるけれども、「濡いた声」の発見には脱帽するほかはない。「乾いた声」の表現は決して奇をてらつたものではなく、梅雨の晴れ間に耳元に届く鳥の声を形容するのに相応しいものと思う。

蜜豆や句友と初の泊り旅

友子

筆者も数年前に所属結社の主宰や仲間と一緒に毎週土日、芭蕉の「奥の細道」をたどる旅に行きました。約一年がかりの旅でしたが、俳句仲間との旅は、勤め先や近所の知人との旅とは異なり、会話を打てば響くようであり、夕食後に聞かれる句会も臨場感にあふれた新鮮な句が出され、親近感に溢れた時間があつたという間に過ぎてゆきました。

汗を流しながら旅の茶屋にたどりつき、そこで冷えた蜜豆を囲みながら話に花を咲かせることができることの作者の喜びが、直線的伝わって来るようです。泊り旅であれば尚更のこと。

ふれるたび香の立つ薄荷夏燕

ヤエ子

すいすいと風を切つて飛び回る燕は、主に視覚を通して句作の対象となっている。燕を捕まえて手にとり、その感触や匂いを直接感じ取ることはない。掲句では、野原を跳び回る燕が、薄荷の草に触れる度に辺りに薄荷の香りが立つという。嗅覚の方向から燕を句作の対象としたものであり、この点で山歩きの好きな作者ならではの出会い頭の斬新的な一句である。

「ふれる」の主語を作者自身と捉えることもできるが、それでは句が平凡となつてしまう。「ふれる」の主語はあくまでも燕であると考えたい。

空中を飛び交う俊敏な燕は、燕同士は勿論として、他の障害物とも接触することは決してない。しかし、その燕が薄荷の草に触れて来るということは、どういうことなのか。「ふれるたび」とあるから、燕が目測を誤つて薄荷の草に偶然的・無意識的に触れたのではなく、燕が意識的に薄荷の草に自ら寄つて来たのであろう。薄荷は単に香料となるだけでなく、漢方薬の原料ともなるから、燕はその薬効的成分を本能的に知っているのであらうか。

俳句は作ろうと思えば書齋の机上でも作れるが、季語の現場に自らの身を置いてこそ優れた作品が生まれるのである。

黒南風や謂はれ失せたる五輪ノ塔

秀一

風化し苔むした五輪塔が目前にある。五輪の塔を配して供養される程の人は、生前はさぞかし地域一帯に様々な意味で影響力があり、あるいは余人に敬慕されていた人物なのであろう。しかし、それも年月には勝てず、今では「謂はれ失せたる」存在となっている。人の世の移ろいの儚さを詠んだものであるが、中七下五のネガティブな意味内容から言えば、黒南風は少しついているという人もいるかもしれないが、白南風ではなく、敢えて黒南風を対置したことによつて、句が引き立っている。

歩み遅く病牛梅雨なか引かれゆく

佳史

口蹄疫を発病もしくは感染した恐れのある牛は全頭「殺処分」とのこと。健康であっても出荷時期が来ればいずれ屠殺されることがプログラムされている家畜ではあるが、いとも簡単に「殺処分」とは人間とは身勝手なもの。科学技術の進歩した今日もなお、このウイルス疾患の最良の防疫方法は、伝染対象のいわゆる「皆殺し」なのである。人間に置き換えた場合、この短絡的な対応にはぞつとする。ナチが精神病患者を社会に不要かつ害のあるものとして、ユダヤ人や政治犯と一緒にガス室に送り込んだように。

さて、掲句に戻りますと、意味と情景は十分伝わって来ますが、賛同者が多くないのは、「梅雨なか」のフレーズにあるものと思います。これによつて全体として散文的な俳句になっています。もしも添削が許されるとしたら、「梅雨の病牛」という表現に凝縮したいところです。

引かれ行く梅雨の病牛歩の遅し

このように上五と下五も入れ替えることによつて、原句の上六も解消され、句が立ち上がつて来るものと思います。「歩の遅し」によつて、後手に回る防疫対策、治療技術面での進歩の遅れに対する批判を感じ取る人もいると思います。

【夏季通信句会のお知らせ】

八月は恒例の夏季通信句会も行ないますので、皆様の奮つてのご出詠をお待ちしております。

以上